

弥生集落史の地平 その2

—凹線紋系土器期以前の弥生中期—

● 石黒立人

弥生時代の集落をどのように捉えるのか。小論では弥生中期前半に時期を限って、まず基本単位を抽出し、その複合のありかたから極大型・大型・中型・小形・極小型に類型区分を行った。そして拠点・集住などいくつかの概念を検討し、最後に極大型を軸に変遷の見通しを述べた。

1 はじめに

(1) なぜ凹線紋系土器期以前なのか

なぜ凹線紋系土器期以前を対象とするのか。というより、なぜ凹線紋系土器期以前でなければならないのか。

凹線紋系土器期以前へのこだわり。この思いは、わたしが埋蔵文化財行政に関係し、朝日遺跡やその他の弥生遺跡を調査し、また土器編年に手を染めて以来もち続けているものである。わたしには事の初めから、弥生時代における諸要素の画期と中・後期区分が何かそぐわないものに思えた。もともと凹線紋系土器期を後期とする立場(註1)が身近にあったけれど、土器編年の画期はそれほど重視していなかった(というよりあまり理解していなかった)から、それが後期であっても中期であってもどうでもよかった。むしろ遺構変遷における凹線紋系土器期前後の変化の方が重要に思えた。かつて凹線紋系土器の影響を環濠の消長にからめて、外部世界の拡大に伴う直接的な波及を表示するとみなし、人間集団の移動に惹起された地域社会の大変動であると理解した。しかし、前後の事象

を整理して比較したわけではないので、具体性に乏しく構想に終わった。

小論は上記の延長にある。わたしが意図するのは、弥生時代の時空区分変更の可能性の追求である。しかも対象を巨視的にではなく、些細な細部からの見直しである。〈大きな話〉は細部が無くとも可能だが、〈小さな話〉は細部に依拠しつつ細部を編み上げるものだから、綻びもすぐに見つかる。その意味で巨視的立場とは異なり論理も実践的・即応的でなければならない。地域に即せば即すほど、空理・空論は峻別されるからである。そこに立ち戻ってから〈大きな話〉に反転しても遅くはないと考える。

もちろん、細部にこだわるといってもおのずと限界がある。小論の主旨は近畿・中部・関東というレベルでの比較なので、個別の遺跡については必要最小限しか深入りしない。詳細は自他の個別論に委ねることを予めお断りしておく。

(2) 都市論をめぐる

現在は沈静(むしろ低迷?)化した「弥生都市論」は、その賛否に関わらず、20世紀最後の数年間において弥生時代研究の主要なモチーフのひとつであった。

(註1) 柴垣勇夫氏や加藤安信氏は朝日遺跡の報告書(愛知県教育委員会 1975、同 1982)において高蔵式(凹線紋系土器期後半)を後期に含めている。それに対して紅村 弘氏や大参義一氏は中期に含めており、わたしもそれを踏襲した。いっぽう、弥生前期について、近畿以西では前半と後半の差異に注目し、そこに画期を認める立場がある。伊勢湾周辺でも金剛坂式や水神平式の成立など土器に大きな変化があり、また方形周溝墓の出現など墓制においても変化がある。しかし、集落は前期の前半と後半で大きな変化は無く、むしろ中期に断絶する例が目立つ。中期の極大型・大型には前期の集落と重複してあたかも継続しているようにみえる例がある。果たして連続性はあるのだろうか。繋がる系譜、途切れる系譜、太い系譜、細い系譜のどれに重点をおくのか、結局はわれわれの歴史観・社会観・文化観による。現実問題として土器編年上の前期・中期・後期の3区分はそれ自体で意味をもっているわけではなく、慣用句に過ぎない。前提である〈弥生時代〉の評価が変われば意味を失う。

そもそも九州は佐賀県吉野ヶ里遺跡の調査・報道をきっかけとして始まり、近畿は大阪府池上曾根遺跡を軸に乾 哲也氏が論陣を張った(乾 1996)。ただ、考古学的というよりは、半ば行政サイドの目的遂行に重点をおく多分にジャーナリスティックな側面もあり、当初はそれが弥生時代研究に果たす役割に関して十分に議論が行われなかった。議論への参加よりも、拒絶が風潮であったように思える。

「弥生都市」肯定論の弱点の一つが資料的な裏付けであると見た秋山浩三氏は、その根幹である池上曾根遺跡の調査への関与を機に、既調査分・新規調査分の事実確認作業を猛然と進め、見事に整理された資料を提示するに至った。調査成果の共有や標準化を意図した緻密な基礎作業とその公表は、池上曾根遺跡を軸とする「弥生都市論」を吟味する上で不可欠であり、この結果、池上曾根「弥生都市論」をめぐる場は、大勢として否定論が主導権を握った観がある今日このごろである(註2)。

しかし、こうした動きが「都市論」あるいは集落論の活性化のきっかけになったのかといえ、近畿では若林邦彦氏や寺前直人氏のほかに目立った動きは無い。相変わらずもの言わぬオーディエンスを前に、大きな舞台上に少数の演者しかいない状況が続いている(註3)。

関東では、これまで安藤広道氏がもっぱら宮

ノ台式期の集落について精力的に考察を進め、さらにその対象を広げている。石川日出志氏や及川良彦氏もそれぞれ集落論を展開しつつあり、潜在的な弥生集落研究者数は近畿以西よりも多いのではないかと思える。近畿以西と異なり都市論に絡むことはないが、むしろそのことが特定の視点に規定されない多様な集落・社会像の構想を可能にするであろう。弥生集落論の活性化は関東から、といったところか。

ところで、九州から近畿にかけて「弥生都市」肯定論・否定論のいずれもが、もとより弥生時代全般を対象としたものではなく、時期的にも弥生中期後半・凹線紋系土器期(近畿第IV様式)以後に焦点を絞る限定的なものにとどまっていることに、あらためて注意を向ける必要がある。佐賀県吉野ヶ里遺跡、愛媛県文京遺跡、大阪府池上曾根遺跡などを巡る議論は実質、凹線紋系土器期(近畿IV様式)から弥生後期に重心があるのであって、池上曾根遺跡の場合、弥生中期前半が議論の俎上にのぼることはまずない。

ここにみえるのは、あくまで〈首長〉を媒介項とする社会構成論、あるいは国家形成論の序論としての、古墳時代前史としての色彩が極めて強いことであって、縄文時代以後の通時的な、連続的な集落変遷としての把握を前提にはしていないのである。

簡単に言えば、「弥生都市」肯定論に与せず

(註2) 秋山浩三氏は池上曾根遺跡の調査データうち遺物を中心に順次再整理・公表を進めている。目下、「都市論」に関わる手工業生産部門(専門的従事者の有無確認)が課題のようなが、しかしその年代帰属については明確でない。長期継続集落遺跡では長期にわたって遺構・遺物が集積されるために個別の年代を決めることは実際のところ難しいし、さらに他者が調査した資料となるとその再発掘・追認は絶望的である場合もある。だが、年代を積分状態においたままでは池上曾根「弥生都市論」と同様に議論は大雑把にとどまる。少なくとも遺構・遺物変遷について様式区分は当然としてさらなる細分を試みる必要がある。空間の質を問うのであれば、遺物分布が細別区分に対応してどのように変遷するのかを把握しなければならない。

わたしたちも朝日遺跡で各種生産物の分布図を作成したことがある。石器関連は時期区分ができないために玉作を除いて手工業生産の空間的イメージを鮮明にできなかったし、木器・骨角器は遺存状況に差があるために一般化もできなかった。けれど、積分状態ではあっても磨製石斧は後述する単位居住区ごとにまとまる傾向をみせ、分業は明確ではないが生産活動の単位が単位居住区にある点は確認できた。むしろ、玉作が特定区画に限定されることを重視すべきだと考える。

集落遺跡における遺物分布は安定累重的ではなく二次的な移動もある。さらに廃棄パターンとの関係もあり、けっしてデータがそのまま過去を語ることは無い。むしろ、データが何を表しているのか、データをどのように解釈するのか、その〈構え〉についての議論こそが集落論のために何にも増して必要であると考ええる。

(註3) 最近、近畿では珍しく、若林邦彦氏と酒井龍一氏の間で対抗的な議論が起きた。若林氏の批判に対する酒井氏の反批判として始まったものだが、両者の議論が弥生集落論・弥生時代論の活性化(演者およびオーディエンスの増加・交流)につながることを期待する。

とも関説するほとんどの研究者は重心の一方を古墳時代に置いて弥生・古墳を一連としてその推移を見ており、結果として遡及的に考えるという傾きをもつ。だからどうしても発展図式にもとづく予定調和的な姿をまとう。

他方、弥生時代に重心をおく研究者の多くも、集落論を重視しこそすれ、都市論には積極的に絡まない。たしかにわたし自身も、「弥生都市論」を研究の軸にする必要は無いと考えているし、はたして軸になるのかどうか、むしろ疑問にさえ思っている。集落論を軸にするからこそ都市論を考える必要があるのではないかと思っている。その意味で後者を大規模集落遺跡論と呼んで差し支えないのではという異論もあるだろうが、あくまで、＜量＞ではなく＜質＞を問いたいので、あえて「都市論」と名づけている。

さて、「弥生都市論」をめぐる動きは反「弥生都市論」を生んだのであろうか。具体的な資料の裏付けが弱い、まさに浮遊する概念の是非を問うことは、けっして反「弥生都市論」ではない。資料読み取りの適正化を図り、＜弥生都市＞という安易なイメージの払拭を進めたことは有効であったし、かえって資料読解のはらむ問題を明らかにした点で必要不可欠であった。この点で、それ自体が「弥生都市論」、そして弥生集落論を構成するものであった。概念としての「弥生都市」への賛否はあったが、だれも「弥生都市論」を消し去ろうとはしていない。

「弥生都市」否定論が事実の確認に固執することは、日本考古学における実証主義の伝統に照らせば、擁護されこそすれ批判されるものではない。むしろ、理念を振りかざす「空想・弥生都市論」が批判されてしかるべきかもしれない。ただ、議論の流れに注意すれば、理念の可能性の広がりを局所的な事実によって限定・制限することに果たして問題はなかったのか、とわたしは思う。都市論の広がりは一遺跡、一資料によって決定されるようなものではない。「弥生都市」肯定論は、いささか性急かつ素朴すぎるものであったが、「弥生都市」否定論の現状も同様に思える。

オギュスタン・ベルク氏も次のように述べている。

実証主義は「同じ尺度で測れるものだけを認め、同じ尺度で測れないものを廃絶する」と（オギュスタン・ベルク 2002、p116）。

考古学において何にも増して事実の積み重ねは重要だが、当該の時空に関係する完全な事実など存在しない。われわれに必要なのは、断片的な（むしろ断片的であり続ける以外にない）考古学的事実をいかに組織化するのか、その論理や事実解釈の＜構え＞の在り様を問い続けることである。適正の「弥生都市論」とはそうしたものであり、「弥生都市論」そのものを否定するべきではない。

従来に無い考え方を提出することは、まさに《試行》なのであり、《錯誤》を経た上でなければ適正化しようがない。ある程度の振れは避けようがなかろう。その振れのいくつかを取り上げるのみで中心軸をなす重要な問題を掴めないとすれば、それは単に研究の広がりも無い偏狭な姿勢となる。

個々の集落遺跡に焦点を結びつつ地域にも焦点を当てる、＜地＞と＜図＞を固定させること無く絶えざる反転を進めるためにこそ、いつその間口の広い議論（それが「弥生集落論」とリンクする「弥生都市論」であろう）が前にも増して必要である。そしてそれは決して古墳時代前史ではない。

わたしは弥生集落論に関わる議論として、「弥生時代の集落はすべてムラか?」「弥生時代に＜都市＞があるならそれはどのようなものか」「＜都市＞とは何か?」という素朴な設問が決して無意味ではなかったと考える。だが、実証主義的・実在論的な傾向は「どの集落遺跡が＜都市＞なのか?」という問題設定へシフトした。「どの集落遺跡が＜都市＞なのか?」という設問は実証主義的考古学では馴染みやすかったかもしれないが、その場合の都市の要件は普遍性が重視され、最大公約数的であり、かつ借用であった。あるいは「都市」成立の史的契機（三木 2003）という言述に示されるように都市成立が国家形成と不可分であるというテーゼに規定された。調査成果に基づき帰納的な道筋がとられるなら、比較集落論的な、その意味で実証的な議論が可能であったと考えるが、残念

ながら都市論を否定するための実証主義になったように見える。実は弥生都市論はこうした研究動向から離脱する契機になったかもしれないが、いまその余地は無いかのようだ。

第2の課題としては、弥生中期前半を軸に集落論の展望について考える。

2 弥生集落を考える

(1) 弥生中期前半の集落の様相

A. 事例 伊勢湾周辺地域の事例を軸に考えてみる(註4)。

朝日遺跡では、弥生中期前葉後半に新たな集落プランが成立する。谷A南側の居住域では、谷Aに並んで東北東から西南西に向かう区画大溝が掘削されて長軸約600mの基本区画が設けられ、これに直交する溝によってさらに約100m四方の単位居住区に区画される。谷A北側は内部がよくわからないけれども、谷Aに接して玉作工房区が設定されている。方形周溝墓からなる墓域は中期前葉には東西2墓域であったのが、中期中葉には居住域の周囲を取り巻き環状をなす。

ここにあるのは<分割と配列>である。単に区画が房状に付随するのではなく、まず一定の範囲が大きく囲い込まれ、その内部がさらに分割されたのである。まさに、水田の大小区画に類似している。わたしはこれを「囲郭集落」と呼んだ。これが<極大型>の姿である。

同類は奈良県唐古・鍵遺跡と石川県八日市地方遺跡。前者は多重環濠の内径が約400mで、内部にも多くの溝が掘削されている(藤田1999)。後者は集落Ⅱ期：弥生中期中葉のピーク時には谷を挟んで長軸500mほどの広がりを持ち、玉生産区域・木器生産区域の存在が窺え、しかも方形周溝墓からなる墓域が朝日遺跡と同様に環状に取り巻く(福海2003)。ほかに三重県納所遺跡および周辺遺跡群、静岡県梶子遺跡および周辺遺跡群、滋賀県野洲川下流域遺跡群なども可能性がある。これらの遺跡では

遺物量が豊富で遺構の密度も高い。また遠隔地の物産も出土し、手工業生産も複合的である。神奈川県中里遺跡について正式報告はまだないが、いくつかの情報によれば、大形掘立柱建物や井戸があり、近畿系や伊勢湾系の土器、サヌカイト製打製尖頭器もあり、遠隔地と広域的に連係している。中里遺跡も地域における相対的な区分で言えば極大型である。

低丘陵上に立地する三重県平田遺跡の下面から、中期前葉に属す2棟の竪穴建物が発見された。同時存在かどうかは判断が難しい。倉庫が見つかっておらず、一時期1棟と看做するのが適当だろう。一時期に1棟としても、これらはどういった性格の居住地なのだろうか。

愛知県門間沼遺跡は中期前葉に属す土器・石器が出土し、土坑もともなっていたが、竪穴建物は検出されなかった。石器には石鏃、粗製剥片石器、凹石、打製石斧があり、粗製剥片石器に使用痕は明瞭であった。同様の遺跡は濃尾平野北部に多い。多くは水田稲作に関わるキャンプ地か？

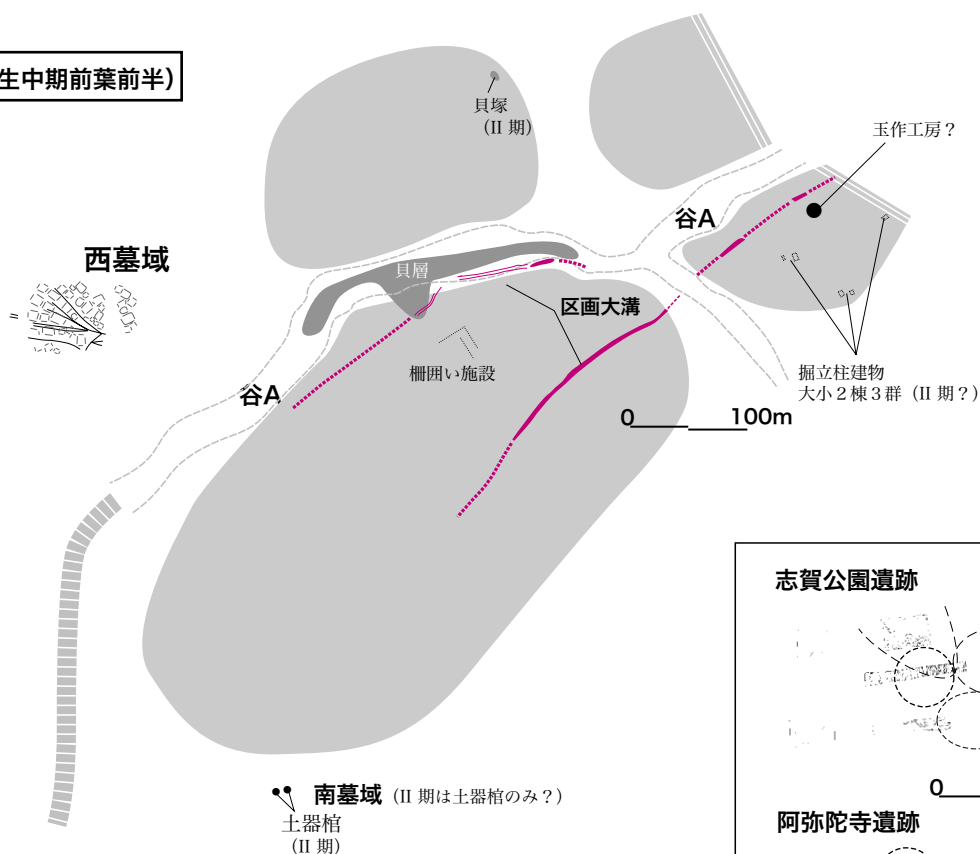
これらが<極小型>の姿である。

極大型・極小型の間を埋めるのが以下の事例である。

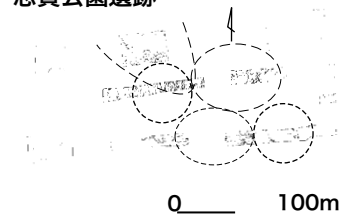
愛知県阿弥陀寺遺跡は朝日遺跡から南西に約3.3kmの距離にある。北側を大溝と低地、南側を谷に画された幅80mほどの東西に細長い微高地に立地している。南側の谷は微高地南端の竪穴建物を切り込んでおり、多少侵食が進んでいるようだ。遺跡形成当初の微高地はもう少し幅が広がったかもしれない。中期中葉前半には床面積100㎡以上の大形竪穴建物を中心にして4単位ほどの竪穴建物・土坑群が約15000㎡の範囲に展開する。各単位は径約50m(約2000㎡)で、後述の志賀公園遺跡の居住域に近似する。阿弥陀寺遺跡の範囲はさらに広く推定されており、調査で検出された単位がどういった位置を占めるのか定かではない。床面積100㎡を超える竪穴建物の検出例が稀有であることを考慮すれば、中核をなす単位であ

(註4) 小論の時期区分は以下の通りである。中期前葉前半：朝日式・朝日Ⅱ期・尾張Ⅱ-1・2期、中期前葉後半：朝日Ⅲ期・尾張Ⅱ-3期、中期中葉前半：貝田町式(古)・朝日Ⅳ期・尾張Ⅲ-1~3期、弥生中期後葉：凹線紋系土器期・朝日Ⅵ期・尾張Ⅳ期(ただし、高蔵式は中期後葉後半に該当する)。

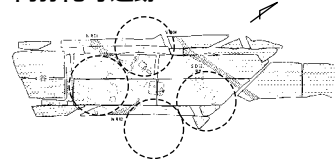
II 期（弥生中期前葉前半）



志賀公園遺跡



阿弥陀寺遺跡



III 期（弥生中期前葉後半）

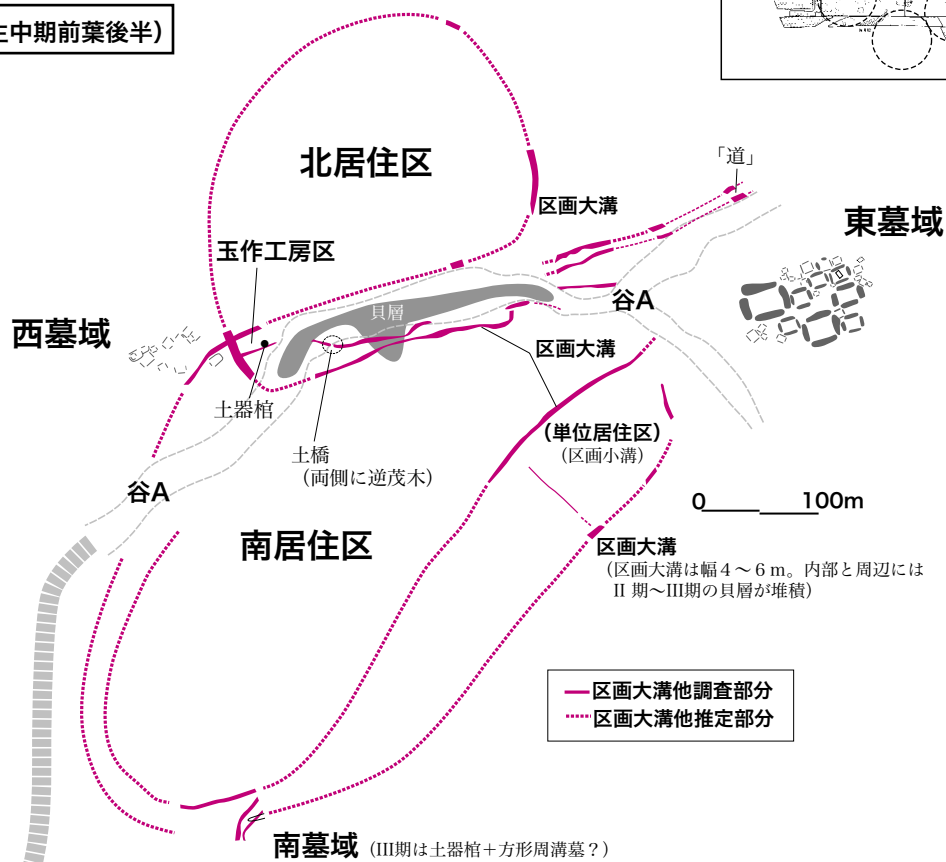


図1 朝日遺跡プラン変遷

った可能性は高い。

なお、阿弥陀寺遺跡の北西約 1 km には同時期の森南遺跡がある。

愛知県猫島遺跡は中期前葉から中葉前半にかけての集落遺跡で、朝日遺跡の北約 6.4 km にある。楕円形の 2 重環濠は長軸が 200 m 以上あり、外濠がところどころ途切れて陸橋部を作っている。東西に方形周溝墓群からなる墓域が形成されている。濃尾平野では朝日遺跡に次いで玉作関連遺物が出土し、玉作工房の存在が想定される。

愛知県八王子遺跡は朝日遺跡の北西約 11 km に位置する。南を河道に画された微高地に 2 重から 3 重の環濠がめぐる。環濠は弥生中期前葉終末から中期中葉初めにかけて掘削される。遺跡の範囲は猫島遺跡と同程度であろう。

岐阜県宮塚遺跡は朝日遺跡の北約 20 km にあり、径 64 m ほどの 2 重環濠に囲まれた小規模集落である。環濠掘削時期は中期前葉末から中期中葉初めにかけてである。生活関連遺構は削平されて残っていなかったが、土器・石器がまとまって出土した。これまでのところ周辺に同時期の遺跡は知られておらず孤立的である。

志賀公園遺跡は朝日遺跡の東南東約 5.2 km に位置する中期前葉後半から中葉前半にかけての集落遺跡である。中期前葉後半に属す竪穴建物と掘立柱建物から構成される径 50 m 弱の居住域が二つ（97 E 居住域・98 J 居住域）並存し、間に方形周溝墓群が展開する。97 E 居住域では「松菊里型」を含む 2 棟の円形竪穴建物と 2 間×6 間と 2 間×4 間の近接棟持柱建物、1 間×2 間の掘立柱建物、廃棄用土坑が見つ

かっている。98 J 区では円形竪穴建物はみつかっておらず、方形竪穴建物と 2 間×4 間の近接棟持柱建物、1 間×2 間の掘立柱建物が見つかっている。ただ、98 J 区から 97 F 区南部にかけては多くの柱穴や土坑もあり、これらの区域には中期中葉以降の居住域が広がっているようだ。中期中葉前半の方形周溝墓群は 98 J 区から 98 I 区にかけて展開しているので、98 J 区北部から 97 F 南部にかけて同時期の居住域が広がっていたと考えられる。居住域の広がりには各時期とも約 2000 m²で、中期前葉は掘立柱建物の切り合いを重視すれば 3 時期に区分できる。未調査分はあるが、竪穴建物は 1 時期 2 棟程度としてそれに近接棟持柱建物が 1 棟組み合わせるとすれば、竪穴建物 1 棟では 1000 m²必要となる。志賀公園遺跡は現状では西志賀遺跡の環濠北東約 400 m に位置し、離れている。この距離が近いのか遠いのかはともかく、居住域と墓域がユニットをなす点で独立した集落ではあろう。だが村落結合という点では無関係ではないだろう。

居住域が 2 単位、墓域が 1 単位からなる集落遺跡は、伊勢湾西岸では弥生中期前葉から中期中葉前半に属す東庄内 B 遺跡が知られる。居住域は径 50 m を超えることはなく、墓域は居住域の間ではなく一方の居住域に接している。しかし、方形周溝墓は 2 列存在するので居住域 2 単位に対応しているとみることができる。

B. 類型区分と建物数の概算

まず、極大型と極小型は設定可能である。

極大型の朝日遺跡は、区画小溝で区切られた

（註 5）竪穴建物は集落構成の基本要素であるが、掘立柱建物は見つからない場合もあるので、竪穴建物を基準にする。

ところで、弥生中期後葉に限定される一色青海遺跡では、愛知県埋蔵文化財センターによる 2003 年度の約 7000 m²の調査で 110 棟前後の建物が検出されたが、削平分を含めればそれを超える棟数になる。6 時期で均分すれば 1000 m²あたり 2.6 棟となるが、遺跡には低調期・高調期もあるから後者では 1000 m²：3 棟（2000 m²：6 棟）の時期があったかもしれない。これだと志賀公園・阿弥陀寺遺跡の 3 倍の建物数になる。かつてわたしは朝日遺跡の竪穴建物 1 棟の必要面積を 250 m²としたが、少し無理があったかもしれない。いくら集住したとはいえ、1 棟 500 m²以下で 2 倍であり、250 m²では 4 倍になる。一色青海遺跡が特殊例なら下限を 500 m²、上限を 750 m²程度に考えると朝日遺跡では 140000 m²で 180～280 棟となる。集住したからといって掘立柱建物が多いわけではないので竪穴建物の中に倉庫を含め 70 パーセントを住居とすれば 126～196 棟、掛ける 5 人で 630～980 人が建物に住む人々ということになる。いずれにしても、志賀公園遺跡や阿弥陀寺遺跡の単位認定については妥当性があると考えるが、朝日遺跡の推定は机上の空論の域にあるかもしれない。

（註 6）建物が存在したのに検出できなかった可能性もある。とすれば集落論の基盤そのものが危うくなるのだが、しかしそれも含めての集落論であるとわたしは考えている。いずれにしても、調査において細心の注意を払う必要があると言うまでも無い。

単位居住区が約 10000 m²の広さを持ち、居住域全体では 140000 m²と想定可能なので単位居住区は 10 単位以上と考えられる。問題は単位居住区に何棟建つのかであるが、単純計算なら 5 単位 10 棟×10 = 100 棟以上、集住して密度が高いなら 2 倍で 200 棟以上となるが、果たしてその正否は（註 5）。

極小型はそもそもしっかりした建物をとまな

わない可能性があり、縄文時代の居住地にも類似する回帰的な居住地といえようか。調査の精度についても再検討すべきかもしれない（註 6）。

極大型と極小型の間には多くの集落遺跡が含まれる。極小型の上位に阿弥陀寺遺跡や志賀公園遺跡でみとめられた単位がくる。ひとつの単位は竪穴建物 2 棟、掘立柱建物 1 棟からなり、2000 m²の広がりをもつ。志賀公園遺跡は 2 単

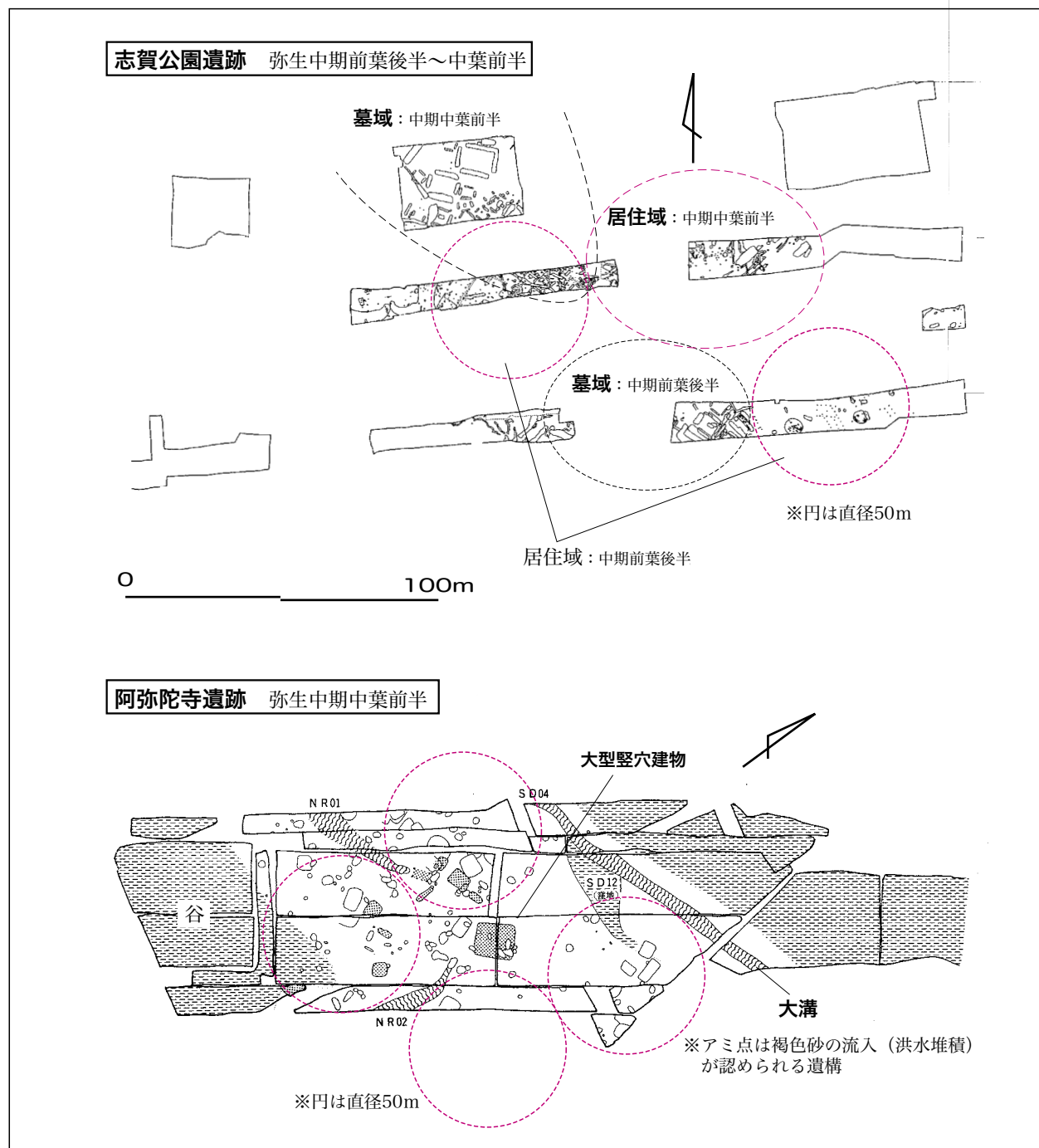


図 2 居住単位的事例

位、阿弥陀寺遺跡には4単位以上が並存する。

宮塚遺跡の広がりとは上記1単位に相当するが、環濠の掘削は単独で可能なのだろうか。環濠は上部が大幅に削平されており、推定規模の見積もり方しだいによって掘削土量は大きくかわる。環濠の深さを1.5 mとすれば1250 m³、深さを2 mとみると2000 m³以上と幅があるが、膨大であることにはかわりはない。1人が1 m³/日の作業量とすれば、のべ1250～2000人が必要となる。もし、1単位2棟の竪穴建物なら、1棟5人で10人という計算を当てはめても実働人員はそれより少ないだろうから、5人なら250～400日、7人としても180～290日となる。4単位が集住したとすれば、60～100日、あるいは45～70日となるけれども、環濠掘削時に周辺集落から応援が来たのかどうか、現状では付近10 km以内に同時期の遺跡は知られていない。

2単位以下の平田遺跡・志賀公園遺跡で大溝の掘削はなく、方形周溝墓の周溝掘削に限定されるが、阿弥陀寺遺跡では幅約5 m、深さ約1.5 mの大溝が掘削されているから、一定の単位数を超えれば大溝の掘削が行われると考えられる。逆に、大溝を掘削するために単位数を増やす（分村せず拡大する）ことがあったかもしれない。

さて、猫島遺跡の居住域は20000 m²以上と推定される。環濠プランについて現状では綺麗な小判型を想像させるが、中央部分に大型建物は検出されていない。したがって、重心は北部（名神高速道路の下）にあり、環濠が北に張り出す扁平なオムスビ形のプランになる可能性もある。検出された遺構分布は密度が低いけれども、後世の削平によるところが大きい。なお、東外側に別区もあるようだが、ここでは扱わない。西部では環濠内側に方形周溝墓が営まれているので、同時期には10単位以上が充当できる。環濠で囲まれているので、1単位2棟以上として20棟以上が同時並存した可能性がある。

さて、極大型と極小型の間は＜大型＞が八王

子遺跡・猫島遺跡、＜中型＞が阿弥陀寺遺跡、＜小型＞は志賀公園遺跡が該当する。単位数に換算可能なのは猫島遺跡以下であり極大型は対象外である。ただ、集住を考慮すれば基本的に環濠集落は推定が難しいのかもしれない（註7）。

（2）範囲と規模、あるいは「拠点」ということ

上記の議論は従来、範囲・規模として行われてきたものである。だが、果たして範囲の大小とは地域社会における序列に関係するのだろうか。じつはこのような問いを立てても解答を導き出すことは極めて難しい。そうした比較図をよく目にするが、根拠は希薄である。

そもそも集落遺跡として把握できるとはどのような事態を指すのであろうか。墓や建物を含む各種生活関連遺構および生活廃棄物のひろがりや途切れたところがその縁辺、その外が境界であるとしても、若干の距離をおいて同様の広がりや展開する場合にそれらを区別することにはどれほどの意味があるのか。通常は集落遺跡を自立した単位と看做しているので近接していても「集落群」と呼ぶことになるが、見かたを変えれば、それぞれを居住域と呼んで、全体を「集落」と考えることもできる。朝日遺跡は初期には「朝日遺跡群」と呼称したけれども、調査が進む中で後者の立場をとって「朝日遺跡」と名称変更した経緯がある。現状では、現在考えられている朝日遺跡の範囲を超えて朝日遺跡が広がる可能性は少ない。貝殻山貝塚地点の南西約1 kmに弥生中期中葉後半の遺物が出土する地区が最近隣のほか、西方2 kmに松の木遺跡（弥生中期前葉～中葉）がある程度で、弥生中期において朝日遺跡周辺は空白地域となっている。石川県八日市地方遺跡も同様の傾向をみせている。

これに対し大阪平野、河内潟周辺では遺跡群としか呼称しようがない濃密な範囲があり、個々の居住域を単独に扱うよりも、密集域として把握する方が適している（若林2003）。滋賀県野洲川最下流域の遺跡群も同様であろう。

（註7）弥生前期には大規模集落はみられず、径100 m程度の環濠集落が多い。それは逆に環濠が掘削可能な人口規模であったということ、つまりは水田開発の基礎単位がどの程度であったかを示しているともいえる。それに比べれば弥生中期の環濠集落ははるかに大規模であり、その機能も弥生前期と同じではないだろう。

近接して複数の居住域や墓域が展開する場合、もちろんその同時性が問題になる。この点に関してわたしは検証を済ませているわけではないが、大雑把に言えば集落の相が異なる地域の集落を単純に比較してきたこれまでの弥生集落論は、改めてそれぞれの地域に即して吟味するべきである。そのうえで他地域との異同を検討しても遅くない。弥生文化というアプリオリな共通基盤は幻想であり、東海の弥生集落を考える上で近畿も関東もスタンダードではない。

考古学的な集落は自律性（現象的には範囲の明確さ）を含意しているが、視点を変えれば密集（集住）域・散在（散住）域という対照も可能であり、それが地域構造と密接に関わることになる。ただ、用語として、集住の大規模・小規模、散住の大規模・小規模がどのような事態を意味するのか、わたし自身十分に整理できていない。この場合の規模の大小は範囲の広狭であるから、集住は大小区分が可能であるにしても、散住の大小は密度が問題となる。建物の重複が無く広がる場合に、密度は極めて低い可能性がある。小規模散住は場合によっては最小単位の住居ユニットになるわけで、それが孤立するのか、一定範囲に関係を有するのかで理解は変わる。

ともかく、環濠をもたない集落遺跡には密集部分と散在部分があり、全域が調査されれば密集・散在とも一つの集落遺跡における二つの相と捉えることも可能だが、部分的な調査の累積では両者を別な集落類型として扱っている可能性が無いとはいえない（註8）。

ところで、拠点集落とは上述の議論とどのように関係するのであろうか。田中義昭氏による〈拠点／周辺〉区分は大小を視点に社会的性格を加味した区分になっており、拠点が中心を意味する（田中 1976）。いっぽう酒井龍一氏は、一定のキャッチメントエリアをもつ径 300 m ほどの定住地を拠点集落とし、拠点集落を形成する集団には複数の基本的生活集団が内属しており、社会の中核を構成するとされる（酒井

1997）。拠点集落は生と死をあわせもつ固有の小世界である。田中氏は関東の事例、酒井氏は近畿の事例に基づく点で一般化できないけれど、従来は重要なモデルとして尊重されてきた。

しかし、〈拠点〉とはそもそも何を意味して、何を指すのか。わたしは拠点集落という用語を使わなくなって久しいけれども、伊勢湾周辺地域で上記の〈拠点〉が意味するところを再検討してみたい。

集落の大小に〈拠点〉は表われているのか。まず極小型は拠点とは無縁である。遺構・遺物が生活や特定作業に必要な分だけしか揃っていないからである。極大型は質・量ともに他を圧倒している。各種手工業生産が行われ、遠隔地の物産も出土し、多様な生産と交通をあわせもつ、ゆえに拠点の典型といえる。

それでは上記の大型・中型・小型はどうであろう。

小型は志賀公園遺跡と宮塚遺跡である。志賀公園遺跡は西志賀遺跡と無関係とは考えられないが、それでも生と死をあわせもつ複数の単位からなる自律的な存在である。この点は東庄内 B 遺跡も同様である。ただ、両者とも環濠はめぐらない。いっぽうで宮塚遺跡は小面積ながら環濠がめぐる。しかし、近辺に同時期の遺跡は知られていない。まだ見ぬ遺跡があるのだろうか。小規模であるにもかかわらず 2 重環濠がめぐる点を重視すれば、それが孤立的でなければ相対的に〈拠点性〉をもつとみなすことは可能である。

中型は阿弥陀寺遺跡である。大型堅穴建物が複数の単位の中心を占め、磨製石斧の再生産や木製品の生産が小規模ながら行われている。調査で確認された部分が遺跡の全体像ではないわけだから、調査部分が集落全域の中核部分であった可能性は残る。周辺 2 km 圏内には森南遺跡・松ノ木遺跡があり、それらに比べれば大きく長期にわたる集落遺跡である。

大型は八王子遺跡や猫島遺跡であり、2～3 重の環濠に囲まれ、猫島遺跡では玉作工房の存

（註8）密集・散在という建物配置は、中世集落を調査しているとしばしば遭遇する様相である。とりわけ 15 世紀では濃尾平野において集住化が進むと考えられているが、それは密集区域と散在区域から構成されており、弥生集落も類比的に捉えられる可能性が高い。

在も窺える。

以上の様相を整理して配列すれば、藤田三郎氏の奈良盆地モデルと同じようなものができあがるのだろう(藤田 1999)。では、そのモデルにおいて拠点集落とはどのレベルが該当するのだろうか。阿弥陀寺遺跡では墓域が見つかっていないけれど、小型でさえ墓域があるのだから当然並存するだろう。つまり、中型以上はすべて、場合によっては小型も拠点集落となる。となれば、拠点集落とは一定程度以上では普通の集落であり、あえて拠点集落と呼ぶ必要も無くなる。むしろ拠点集落ではない集落遺跡を探す必要があり、それが小論の小型・極小型であるが、事例は少ない。

拠点集落がこのように単一の相ではなく幅をもつ存在であるなら、それはどのように区分すべきか。すでに大規模で長期であることは拠点集落の要件なのでここでは除外される。また手工業生産の有無も、特殊品目を指標にすれば別だが、ブリコラージュ程度なら中型以上では常態であろうから除外される。道具の手直しや修繕ぐらいはどこでも行われているであろうし、それができないのは道具の需給体制から疎外された現代都市民だけである。

わたしは、拠点集落は結局のところ区分できないと考える。つまり、拠点集落という概念では弥生集落の複雑さは説明できないのだ(註9)。しかし「都市」は駄目だという、ならばどうすればよいのか。

(3) 過度な集住と外部依存をめぐる

都出比呂志氏は「都市」の定義についてG. チャイルドに拠りつつも、「過度な集住と外部依存」であると単純明快にのべた(都出 1997)。つまり、過度な集住により自給自足を喪失した、ゆえに外部依存型社会であり、そこ

に特殊機能が発達して特化されたものということである。

さて、人間集団は通年定住するやいなや外部依存が必須となり、物流網の成長・定着が集落存続の前提になった。瀬口真司氏によれば、それは弥生時代ではなく、縄文時代中期後半のことである(註10)。とすれば、ここで都出氏が提起した都市論の要件がひとつ脱落することになる。確かに、都市の実在を問うのであればいくつかの要件があろうが、少なくとも外部依存がその要件に相応しいのか再検討が必要である。広瀬和雄氏はここで物流の管理・統制機能を都市機能として挿入するが、結局はそれを担う人格である首長を代入することになるのであつて、具体的な接近から後退することになる。

弥生時代の外部依存は遙か以前に人間が定住を開始して以来の延長にあり、それが「過度な集住」をおこなった場合に依存を必要とする品目・量が過度に増加、強化されたということである。問題は品目・量の増加が比例的なのか、飛躍的なのかだが、前者は縄文時代以来の量的変化、後者こそが弥生時代としての質に関わる。また特殊機能も過度な集住に伴い内部的・外部的な調整機能を発達させる必要から生じたと考えられるのであつて、ここではなぜ「過度の集住」が起こったのかが基本的な課題となる。ここで広瀬氏は「過度な集住」の原因を権力に求めるが、それはどのように証明されるのだろうか。

実際のところ「過度な集住」とはどのような事態を指すのか、集落遺跡に即して示すことは容易ではない。各種生活関連遺構・遺物の量を測定することは、集落遺跡の完全発掘ができない中で、せいぜい遺跡の範囲をそれに代えることができるだけである。とりわけ長期に重複して営まれるのがここで問題にしようとしている

(註9) <拠点>は周辺と対比させれば中心の謂いとなるが、関係性における<拠点性>を考慮すればネットワークの結節点となる。この意味で、酒井龍一氏の「拠点集落」は中心ではなくネットワークの結節点を意味する(ゆえに、「線態」「面態」も可能になる)。孤立的な集落が想定できない以上、集落には程度の違いはあれ<拠点性>が内包されているといえる。もちろん閉じた空間における<拠点>と開かれた空間における<拠点>はおのずと異なるだろうが、<拠点・性>から言えるのはここまでである。弥生集落の内実にまで踏み込むには別の概念が必要であり、現在それが求められている。弥生集落論は酒井氏のネットワーク論によって実証主義的原子論から脱皮したはずであつたが、日本考古学の伝統はあまりにも強固だ。「都市」論も正しくはネットワーク論であるとわたしは考えるが、相変わらず実証主義原子論に絡めとられ<関係性>から切り離されている。

(註10) 勢濃尾研究会第3次年研究会(2003年12月13日開催)の口頭発表・レジュメによる。

極大型であり、それは＜大規模・長期継続・集落＞遺跡なのであるから時期ごとの数量を描き出すことは困難である。せいぜい、すでに崩壊し去った数多の遺構に思いを馳せるのみである。

そもそも大規模であれば、それが「過度な集住」ということでなくても、なぜ大規模な集落遺跡が成立したのか、その背景は何なのか、という単純な問題設定で十分ではないかと考え

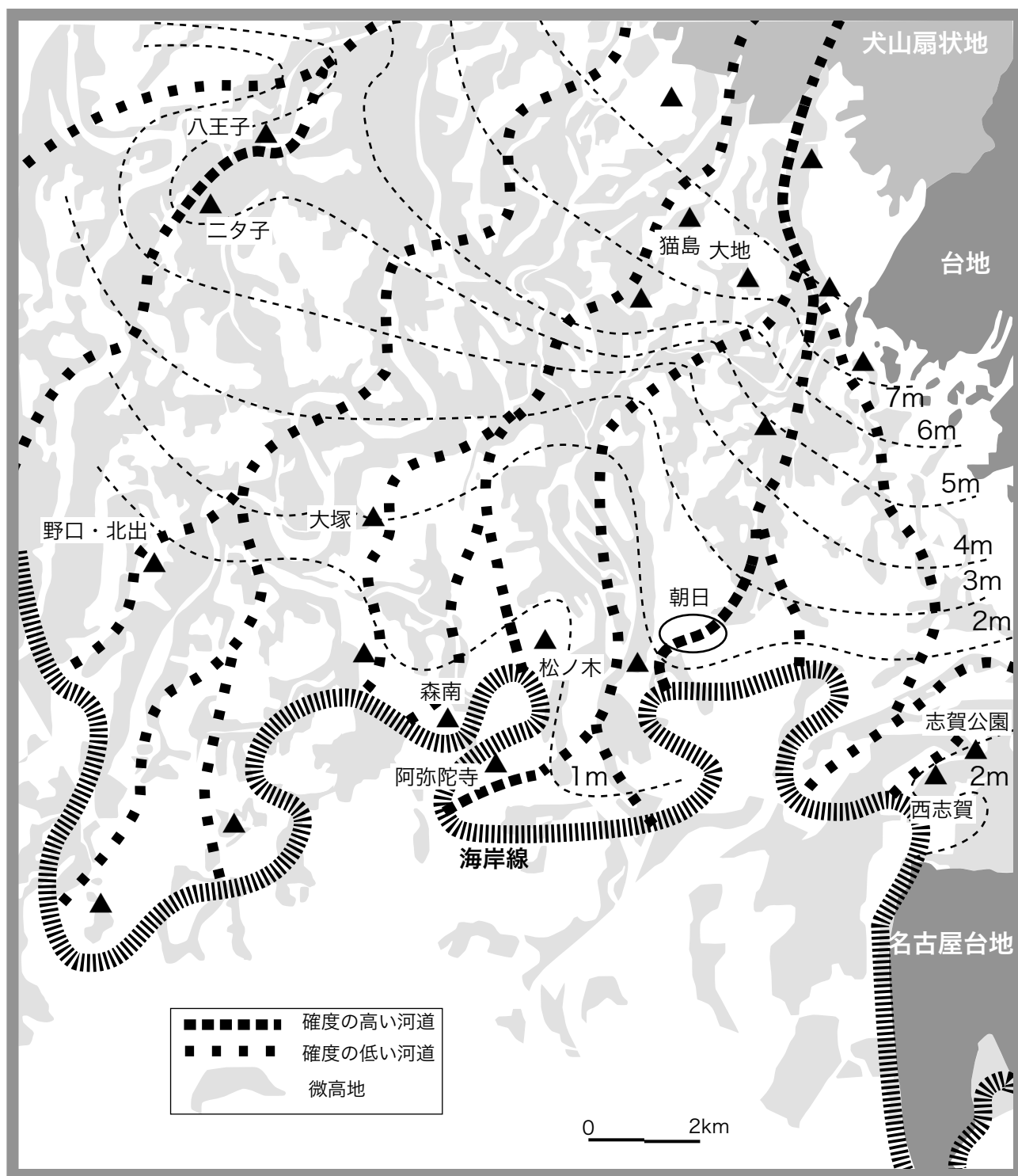


図3 濃尾平野南部における弥生中期前半の遺跡分布

※等高線・河川・海岸線は想定。土地条件図をもとに調査データを加味して作成。

る。なぜ、朝日遺跡や中里遺跡のような極大型が成立したのか、そして、それがなぜ旧国範囲で一か二つ程度しかなく、しかも弥生中期という限定された時期に存在するのかということである。

3 極大型の変遷

(1) 弥生中期に極大型が成立したということ

朝日遺跡は中期前葉前半の姿がいささかおぼろげけれども、中期前葉後半には全体プランを確立する。八日市地方遺跡も集落Ⅱ期にピークを迎える。中里遺跡は前にも後にも無い。なぜか。

弥生時代には灌漑型水田稲作が普及し、それに合わせて道具の体系も変わる。道具体系の変化は生産・供給にも変化を及ぼしたが、縄文時代以来の道具で代替可能なものはそのまま存続した。しかし、もっとも変化を必要としたのは社会組織であった。弥生時代には大小長短、多くの溝が掘削されたが、そのための新たな道具立てと労働編成が必要であった。集住はの一つであり、それが開墾・基盤整備等のための労働力の基盤をなした。集住や労働力の大規模化は当然のことながら農具だけでなく生活用具など各種道具類の必要量を増大させた。そのために外部依存の比重はより高まった。安定流通は前提であり、それを担う集落相互のネットワーク化が進行したであろう、というのが極大型をめぐるわたしの認識である。

もう一度確認しよう。人口密度が低ければそもそも上記の実現は不可能である。小規模な集落が分散するだけでは、灌漑水路の掘削・維持・管理などを伴う開発型の水田稲作を行い、独自に各種道具類を確保することは難しい。そのために人口密度の低い地域ではある時期に極大型や大型の集落を形成して、労働力の集約、つまり労働力の再生産のための基盤を確保し、さらに生産活動の基盤である各種手工業生産をも集中したのである。その上で周辺地区の開発を進めるとともに、中型以下の新開集落を析出させたを考える。集落の析出は、母村・子村関係ではあっても人口増加によるものではなく、極大型・大型によってまず中核を形成し、それを基盤として新たな定住地を確保し、その密度を高めるとともに流通ネットワークの安定化を図

り、水田開発や集落の再生産を進めていったと要約できるだろう。したがって、この理解による限り、新開集落は極大・大型とユニットをなすのは当然として、自然発生的な集落ではなく計画的集落ということになるし、極大型・大型は他より長期継続でなければならなかったといえる。

流通ネットワークの形成と水田開発に伴う新開集落の析出は現象的に重なっているが、基本的には別の動きである。流通ネットワークの形成は極大型および大型集落の成立を契機とし、新開集落の形成とともに網の目は細かくなっていった。そのなかで、くまなく行き渡った品目と、特定の集落で消費された品目が生まれ、その差をわたしたちは「威信財」という用語で表現しているが、実際のところ「威信財」の同定は容易ではない。要は普及財と希少財（プラス広域流通品）ということだけでも、前者はどこでもみられるが、後者の出土は集落遺跡のグレード（階層序列化）を窺わせる、ということである。

さて、水田開発は、極大型・大型を中心にしてひたすら外部へと開発が進行し、それにあわせて中型以下の新開集落が析出されたと考える。それらの関係性こそが集落群であろう。ただし、その分布が同心円的である保証は無い。長大な水路網を軸とするなら、線的・面的の両者があり、その決着は中小河川や旧地表面の起伏を復元しないと不可能である。集落遺跡の地理的分布における最近隣関係が確かに有意な時期・時代もあるが、弥生時代中期まで時代が下れば、それが実際の社会関係の粗密を表すと考えるのはあまりにも素朴である。むしろ関係の再生産こそが歴史・神話であり、それは空間的距離に還元されない。ただ、残念ながら物質を研究対象にする考古学では歴史・神話を扱う方法は十分に洗練されていない。

極大型や大型集落は流通ネットワーク形成の基盤であった。そして実態はターミナルではあったと認定できても、中継点であったと結論づけることはできない。朝日遺跡は磨製石斧の破損品を素材とする再生産（二次的生産）が行われた「消費地型生産地」である。それは基本的に供給を目指すものではなく、あくまで「と

ことん使い切る」という方向にあったと考える(註11)。濃尾平野ではこのことが大なり小なり集落における生産局面を規定していたであろう。

(2) 極大型は唯一無二ということ

極大型は大型と峻別できるが、大型を析出した母体ではないし、また地域のなかでピラミッド構成の首座を占めるかどうかもわからない。むしろ、手工業生産の多様性・複雑性、広域的な関係性、継続する大規模性に意味がある。先には安定化のためにまず集住したと見え、基盤を確保して後に周辺に進出したと説明した。そうならば、極大型は縮小して周辺に集落を分散させたのか。実は、朝日遺跡は周辺に段階的に集落を分散させた様子は窺えない。特に北東側が空白になっており、現状では朝日遺跡への集中が目立つばかりである。実際は志賀公園遺跡のような小型が周辺に点在していたと考えているが、なお集中を継続しており、極大型は中期後半に続く(註12)。

朝日遺跡が析出したであろう小型の実例は明確ではないけれども、中型については阿弥陀寺遺跡が該当すると考えている。中期前葉末に朝日遺跡から析出した中型である可能性は高い。

したがって、この範囲では極大型を中心にして大型・中型・小型という配列にはならない。ただ、阿弥陀寺遺跡と森南遺跡のように中型から小型の析出は通常のありかたであったと考える。小型は極大型、大型、中型いずれからも析出するということであろう(註13)。

(3) 極大型の終末

弥生中期前半に成立した極大型の連続性は凹線紋系土器期をもって途絶える。八日市地方遺跡も戸水B式期には衰退する。

凹線紋系土器期には三重県では長・山籠遺跡群(丘陵上に立地)、愛知県では一色青海遺跡、川原遺跡など注目すべき遺跡が存在する。これらは同時期では規模が大きいだけでなくきわめて密集度が高い。だが環濠はめぐらないし、凹線紋系土器期のうちに終末を迎える。朝日遺跡もこの時期に集落が営まれるけれども、墓域の連続性が途絶えるので同一集落の連続とは考えない。この点が唐古・鍵遺跡と異なる。

わたしはここに環濠の廃絶に重ねて、極大型集落の歴史的連続の途絶をみたいのである。

(註11) この点に関しては長野県松原遺跡も再検討が必要だろう。榎田遺跡はたしかに「原産地型生産遺跡」であるが、松原遺跡はあくまで消費地であって、流通ネットワークをコントロールする機能があったかどうかはわからない。むしろ榎田遺跡の3重環濠で囲まれた集落こそが春山B遺跡や松原遺跡など千曲川流域の遺跡群に対して中枢機能を果たしていた可能性は無かったのかと、わたしは思っている。

(註12) 朝日遺跡には円窓付壺、八日市地方遺跡には多様な木製祭具、唐古遺跡には大型掘立柱建物があり、これらは同時期に一般的ではない。朝日遺跡の円窓付壺は凹線紋系土器期にも存続するが、その出土量は朝日遺跡への集中が顕著である。また、弥生中期中葉では浅鉢類が他にないほど出土頻度が高く、独自性が窺える。創造性も極大型の要件である。

(註13) こうした関係がそのまま社会関係の安定性・連続性を意味するわけではない。若林氏は近畿について社会的安定性・統合性を維持する基盤として親族関係を想定したが、同祖同族が同心円的な広がりをもつとは限らないし、親族関係が相互の安全を保障するとも限らない。親族関係がある種の社会的緊張を緩和した可能性が無いとはいわないけれども、同時に緊張の原因になった可能性もあり、両義的であろう。

集落はいったん成立すれば、各種ネットワーク関係による相互の規制が多少はあっても、その振舞いは自由であろう。とはいえ、洪水の頻発する低地帯が広がる河内平野や濃尾平野の集落間関係は、人々の移動が不測の事態ではなく織り込み済みであるような柔軟性がなければ存続できない。緊張と緩和の間で揺れるあらゆる関係の結節点として、極大型があらわれた可能性も考えてみたい。

大型は別にして中型から小型までは単位の複合という程度であり、それは個別の条件に適応したもので統一基準と序列が背景にあるわけではない。大型、そして極大型が核として存在したからこそ中型から小型が成立したのであり、したがって成層的なピラミッド構成ではなく、あくまで平板的な関係性において突出した集落を極大型・大型と考える。見かけ上、濃尾平野では極大型・大型が径約10 kmに一つ程度存在して核を形成し、周辺を中型から小型、そして極小型が埋めるけれども、その配列はどのようにも読み取ることができる。わたしは、朝日遺跡が最近隣関係を超越するとみているが、いまだ十分に説明できない。

小論は、青木一男、秋山浩三、安藤広道、石川日出志、伊丹 徹、大島慎一、蔭山誠一、酒井龍一、笹沢正史、佐藤由紀男、篠原和大、菅榮太郎、武末純一、田崎博之、中島郁夫、瀬田佳男、馬場伸一郎、平井 勝、平井典子、藤田三郎、福海貴子、穂積裕昌、松本 完、松本洋明、

森岡秀人、若林邦彦の諸氏との交流において、わたしが受け取った明示的・暗示的な種々の教示に基づく。また一色青海遺跡については樋上昇・早野浩二両氏からいろいろ教えていただいた。多謝。

主要〔参考・引用〕文献

報告書

- 愛知県教育委員会 1975『環状2号線関係 朝日遺跡群第一次調査報告』。
愛知県教育委員会 1982『朝日遺跡Ⅰ（本文篇Ⅰ）』。
愛知県埋蔵文化財センター 2000『朝日遺跡Ⅵ』。
愛知県埋蔵文化財センター 1990『阿弥陀寺遺跡』。
愛知県埋蔵文化財センター 1999『門間沼遺跡』。
愛知県埋蔵文化財センター 2001『志賀公園遺跡』。
愛知県埋蔵文化財センター 2002『八王子遺跡』。
愛知県埋蔵文化財センター 2003『猫島遺跡』。
甚目寺町教育委員会 1990『森南遺跡』。
三重県教育委員会 1970『東庄内B遺跡』『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』。
津市教育委員会 1989『長遺跡』。
安濃町教育委員会 1987『平田古墳群』。
三重県埋蔵文化財センター 1997『一般国道23号中勢道路（9工区）建設事業に伴う長遺跡』。
各務原市埋蔵文化財調査センター 1994『宮塚遺跡A地区発掘調査報告書』。

論文他

- 秋山浩三 1999「近畿における『神殿』・『都市論』の行方」『ヒストリア』163号、大阪歴史学会。（この他、関係文献多数）
乾 哲也 1996「弥生中期における池上曾根遺跡の集落構造—都市的集落の解明に向けて—」『ヒストリア』152号、大阪歴史学会。
宇野隆夫 1998「原始・古代の流通」『古代史の論点』第3巻、小学館。
金関 恕 1998a「都市の出現」『古代史の論点』第3巻、小学館。
金関 恕 1998b「都市の成立—西と東—」『考古学研究』第45巻第3号、考古学研究会。
蒲原宏行編（図録）2003『弥生都市はあったか—拠点環濠集落の実像—』佐賀県立博物館。
酒井龍一 1997『歴史発掘⑥ 弥生の世界』、講談社。
菅榮太郎 2003「弥生時代環溝集落小論（2）」『考古学に学ぶⅡ』同志社大学考古学シリーズⅧ、同志社大学考古学シリーズ刊行会。
武末純一 1998「弥生時代環溝集落と都市」『古代史の論点』第3巻、小学館。
武末純一 2002『弥生の村』日本史リブレット、山川出版社。
田中義昭 1976「南関東における農耕社会の成立をめぐる若干の問題」『考古学研究』第22巻第3号、考古学研究会。
地村邦夫編（図録）『弥生都市は語る—環濠からのメッセージ—』大阪府立弥生文化博物館。
都出比呂志 1997「都市の形成と戦争」『考古学研究』第44巻第2号、考古学研究会。
寺沢 薫 1998「集落から都市へ—首長居館の成立と都市の誕生—」『古代国家はこうして生まれた』、角川書店。
広瀬和雄 1998「弥生都市の成立」『考古学研究』第45巻第3号、考古学研究会。
福海貴子 2003「小松市八日市地方遺跡の報告」『フォーラム 北陸における弥生都市—小松市八日市地方遺跡を検証する—』小松市教育委員会。
藤田三郎 1999「奈良盆地における弥生集落の実態」『考古学に学ぶ』同志社大学考古学シリーズⅦ、同志社大学考古学シリーズ刊行会。
三木 弘 2003「『弥生都市』の射程」『羽衣学園短期大学研究紀要』第39巻。
若林邦彦 2001「弥生時代大規模集落の評価—大阪平野の弥生時代中期遺跡群を中心に—」『日本考古学』第12号、日本考古学協会。
若林邦彦 2003「基礎集団・遺跡群・弥生地域社会—大規模集落評価をめぐる補論—」『考古学に学ぶⅡ』同志社大学考古学シリーズⅧ、同志社大学考古学シリーズ刊行会。
オギュスタン・ベルク 2002『風土学序説』、筑摩書房。